

日本彫刻寄贈者へのエミール・ギメの 礼状

——ラ・マルミットとの交流——

岡村嘉子

はじめに

2018年の晩秋、パリにある歴史を彩った作家・著名人の手稿を扱う専門店で、私は偶然にもエミール・ギメ (Émile Guimet 1836-1918) の手稿を見つけた。それは、彼が創設し館長を務めた国立ギメ美術館¹⁾ 公式の便箋に記された、作品寄贈者への礼状²⁾ (図1) である。

この礼状には、寄贈作品が日本の神像であると書かれている。また余白には、寄贈者への私的なメッセージも添えられている。その内容はギメが会員であった共和主義者の結社ラ・マルミットの活動に関するものであった。この書簡は、同美術館における日本美術コレクションの形成への協力者や、ギメとラ・マルミットとの関わり的一端を明らかにするものではなかろうか。

そこで本論では、礼状の筆跡等を分析した上で、寄贈作品の詳細を当時の資料や現在のギメ美術館所蔵作品との照合を通じて明らかにしたい。加えて、ラ・マルミットの会報や先行研究を分析することで、この結社の性質やギメとの関わり、さらにはギメ美術館に日本の彫刻作品が所蔵されるに至るギメと寄贈者の関わり方を考察したい。

1. ギメの筆跡の特徴

この礼状の文面は、部分的な印刷の上に、ギメが寄贈内容や寄贈者名、日付や署名、メッセージを記したものである。この礼状におけるギメの筆跡には、主なものに限っても以下の特徴が認められる。

- ① 寄贈者名グベール (Goubert)、及びギメの署名の大文字「G」の筆記体は、曲線を強調しつつ上部がしっかり開いた「接筆開型」である。
- ② 署名を除く大文字「G」の上部左側は筆圧が強まっており、他部に比べ太い。
- ③ 数字2の上部及び角部（転折部）が丸い。
- ④ 数字9は、「縦線下部長突出型」である。
- ⑤ 数字8に極端なハネがある。
- ⑥ 「fille」の小文字「ll」、「reconnaisant」及び「aussi」の小文字「ss」は、筆記体ながら繋げず、各字を独立させて記している。
- ⑦ 小文字「m」及び「n」においては同じ部分に筆を重ねることはなく、比較的等間隔に離している。その際の筆圧は、下方向が強く、上方向が弱い。また角部は鋭角的である。
- ⑧ 文章は斜体で書かれているが、各角度は不揃いである。同様に文字の大きさも不揃いである。
- ⑨ 署名「E. Guimet」の大文字「E」は、極端なくずし字である。
- ⑩ 署名では、小文字「t」の横線を突出させた後、全体を丸く包んでいる。

以上の特徴は、筆者が2021年、2022年、2023年にギメ美術館図書館にて調査した、同館所蔵のギメの自筆ノートや書簡や契約書等³⁾における彼の筆跡と共通したものである。

また用紙にも、ギメ美術館図書館所蔵の文書との次のような共通点が見られる。第一に、中央に透かし模様のある約22 cm×約38 cmの便箋が使われ、第二に、便箋の長辺を二つ折し、縦長の片面ごとに文章が記されている。その際、左下にそのページ数が記されている。なお、この礼状には1頁のみが使われているので2頁目以降はない。第三に、1頁目の左上に2つの機関の

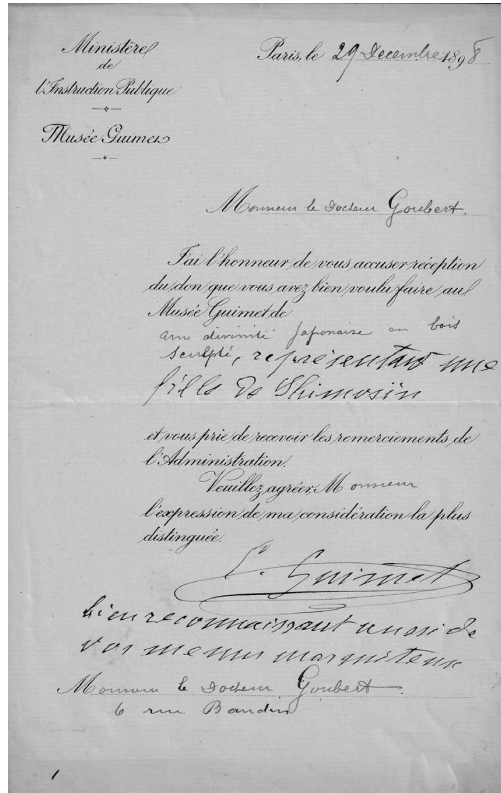


図1 ギメのグベール医師宛て書簡、1898年12月29日付、岡村嘉子蔵。
Lettre d'Émile Guimet au Docteur Goubert datée du 29 décembre 1898,
Collection Yoshiko Okamura, Tokyo © Yoshiko Okamura

名称——「公教育省 (Ministère de l'Instruction publique)」と「ギメ美術館 (Musée Guimet)」——が印刷されている。ここで公教育省の名が連ねられている点には、ギメがリヨンに創設した私立美術館をパリへ移転させて国へ寄贈し、美術館が国の管理下に入った経緯が反映されている。この二重の表記は、同美術館図書館所蔵の文書では、とくにリヨンからパリへの移行期間に当たる1886年以降の文書に見られる特徴である⁴⁾。

以上、筆跡、用紙、用紙の体裁に、ギメ美術館図書館所蔵アーカイブとの共通項が多く認められることから、本礼状はギメの自筆のもとと推測される。

2. 礼状の全文とその訳

以下に全文を書き起こし、訳出した。

■原文

Ministère de l'Instruction Publique · Musée Guimet

Paris le 29 Décembre 1898

Monsieur le Docteur Goubert,

J'ai l'honneur de vous accuser réception du don que vous avez bien voulu faire au Musée Guimet d'une divinité japonaise en bois sculpté, représentant une fille de Shimosin, et vous prie de recevoir les remerciements de l'Administration.

Veuillez agréer, Monsieur l'expression de ma considération la plus distinguée.

E. Guimet

Bien reconnaissant aussi vos menus marmiteux

Monsieur le Docteur Goubert.

6 rue Baudin

■拙訳

公教育省・ギメ美術館

1898年12月29日

グベール医師殿

貴殿がギメ美術館へのご寄贈をご所望下さった、シモザン（あるいはシモシン）の娘を表した日本の木彫女神像を拝受いたしましたことを、謹んでお知らせ申し上げますとともに、弊省〔訳注：公教育省・ギメ美術館〕⁵⁾より御礼申し上げます。

敬具

E・ギメ

あなたのマルミトゥーナメニューの数々にも心から感謝いたします。

グベール医師殿

ボーダン通り6番地

3. 寄贈内容——1898年礼状と1904年刊行物の比較

礼状には寄贈作品について次のように記されている。

Shimosin (シモザンあるいはシモシン) の娘を表した、日本の木彫女神像。⁶⁾

ここでは詳細が不明なため、「*fille de Shimosin*」の「*fille de*」を「の娘」と暫定的に訳したが、*de* を所有ととるか、同格ととるかで意味が変わる。前者の場合は「の娘」だが、後者の場合は「娘本人」となる。「日本の木彫女神像」とは、具体的にはいずれの作品に該当するのであろうか。

当時の美術館への寄贈作品を最も明らかにしてくれる資料は、寄贈の5年後に当たる1904年に刊行された『ギメ美術館創設25周年——1879-1904』(*Le Jubilé du MUSEE GUIMET Vingt-cinquième anniversaire de sa fondation 1879-1904* 以下『ギメ美術館25周年』と略記)⁷⁾である。同書には、創設時から1904年までの作品寄贈者リストが掲載されている。それによると、グベールの名と寄贈内容が以下の通り記されている。

グベール——中国の木彫彩色女神像 (*Une divinité bois peint. Chine*)。⁸⁾

ここでは「日本の」ではなく「中国の」木彫女神像に変更されている。また「Shimosin」の語はなくなり、代わって、「彩色」という新たな情報が付されている。

このことは、寄贈時に日本の女神像であるとギメとグベールが考えた作品が、その後の美術館における調査で中国のものと判明したことを示唆しているのであろうか。それとも単にこの寄贈者リストへの記入漏れもしくは省略表記⁹⁾に起因するのだろうか。

4. 1878年パリ万博時における鬼子母神像の表記

そもそも、「Shimosin」とはいったい何を指すのであろうか。「Shimosin」

という名の神話上の人物や土地は、管見の限り見当たらない。仮に「Shimosin」を「シモシン」もしくは「シモジン」と読むならば、「地母神」が音として近い。とすれば、伊弉冉命のことを指しているのであろうか。それもまた釈然とせぬまま考えあぐねていたところ、学生時代の恩師である岩佐光晴先生から「Shimosin」に関する大変興味深い示唆を賜った。

岩佐先生はこの件が学術的に難問であることわられた上で、寄贈作品は「鬼子母神像」の可能性のあることを指摘された。その論拠として、先生は以下を挙げられた。

- 1：Shimosinという音から「神母天」（じんもてん）、すなわち「鬼子母神」が連想できること。
- 2：Kishimojinの「Ki」をとり、「j」を「s」に変えると「Shimosin」になること。ギメが「鬼子母神」を音で聞き、その音をそのまま表記した可能性が考えられること。
- 3：鬼子母神像は女神（赤子を抱く姿が多い）で、木彫彩色像としての像例が多いこと。
- 4：3には中国で作られた作例も想定できること。そのため1904年の寄贈リストの表記とも矛盾しないこと。

音と像例に着目された岩佐先生の示唆を裏付けられる資料がある。

それは、1878年パリ万国博覧会においてギメが行った「極東の宗教」展¹⁰⁾の解説書『万国博覧会 歴史ギャラリー・トロカデロ会場「極東の宗教」エミール・ギメ氏の展示作品およびフェリックス・レガメ氏の絵画とデッサンについての解説書』（*Exposition universelle Galeries historiques-Trocadéro, Religions de l'extrême orient, Notice explicative sur les objets exposés par M.Émile Guimet et sur les peintures et dessins faits par M.Félix Régamey.* 以下『解説書』と略記¹¹⁾（図2）である。ギメは、1876年にフランス公教育・美術省から派遣され、極東にて宗教事情調査を行った。この展示は、その際の膨大な収集品の一部を、翌1879年のギメ美術館の開館に先駆けて初めて一般公開したものである。

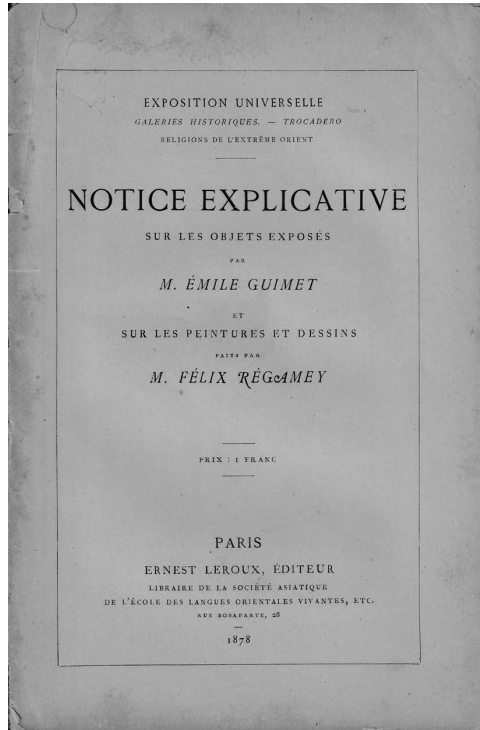


図2 1878年パリ万国博覧会におけるギメの展示の解説書、岡村嘉子蔵。

その詳細な解説書である同書には、出品作として2点の「鬼子母神像」に関する言及がある。その表記は一つが「Kshimozin」であり¹²⁾、もう一つが「Kshimosin」である¹³⁾。1878年の時点で、ともに「鬼 (キ)」が「Ki (キ)」ではなく、「K (ク)」と表記されていたのである。また前者は、「両腕に一人の子供を抱え、彼女の千人の娘のうち4人とともにある」とされ¹⁴⁾、後者は「彼女の10人の娘」とともに¹⁵⁾表わされていると解説されている。前者はまさしく赤子を抱く姿が想像されよう。

ところで、「鬼子母神像」という像名に、サンスクリット語ではなく日本語の音による表記が採られていることにも注目したい。1870年代のフランスは日本よりもサンスクリット語の研究が進んでいたが¹⁶⁾、ギメは自身のコレク

シヨンの像名を表す際に、日本語の音による表記を多く採用した¹⁷⁾。それは、収集品の多くが日本で入手されたことと、それらを日本人留学生たちが整理、分類、翻訳していたことをうかがわせるものである¹⁸⁾。

フランス語において、フェニキア文字に由来する K は、ときとともに大半が C や Q に換わったため、地名や一部の語や略号や非ラテン語系言語など限られた語での使用となっている¹⁹⁾。つまり、阿弥陀 Amida や地藏 Jizo に比べて、「K」で始まる日本の語は馴染みが薄く、記憶が曖昧になりがちである。加えて、音においても、母音を含まない「K」は、続く「Shi (シ [より近いのは j i])」にかき消されがちになる。こうした「K」の性質により、1878年から1898年の寄贈までの約20年の間に、おそらく「鬼子母神」の「K」が脱落したのではないかと推測される。そうであるならば、やはり寄贈作品は「鬼子母神像」であるとギメが考えていた可能性があるのではなかろうか。

5. 2023年ギメ美術館作品調査とその結果

こうした推測の難しさは、手紙やカタログに作品の画像がないことに起因している。グベールによる寄贈作品は、現在のギメ美術館所蔵作品のいずれの作品に該当するのであろうか。それを明らかにすべく、2023年秋、同美術館コレクション部にてアルバン・フランソワ主任のご協力のもと調査を行った。

同部が所蔵する手書きの所蔵作品台帳や、データベース化された創設時から現在までの寄贈者リストの双方に、「グベール医師」の名が刻まれていた。それらを参照すると、彼は1898年に1点の寄贈を美術館にしており、その作品は現在、《吉祥天女像 Fille de Kishijo-ten》木造・彩色・真鍮、像高23 cm、19世紀、日本（所蔵番号 MG11942）とされる作品に該当することが判明した。このことから、本作品の制作地を中国とみなした1904年の『ギメ美術館25周年』の表記は、当時の学芸員の誤りであったとわかる。

コレクション部のデータベースによると、先行研究において本作品が刊物上で言及されたのは、ギメ美術館別館の仏教パンテオン監修者でコレ-

ジュ・ド・フランス教授のベルナール・フランクの1991年の研究『日本の仏教パントオン——エミール・ギメ・コレクション』²⁰⁾が唯一である²¹⁾。同研究においてフランクは、本作品を図版(図3)とともに次のように解説している。

左手に大きな葉と蕾のついた蓮華を一茎持ち、右手は地面を指して掌を内側に向けた、内外のあらゆる敵を制する意のある印相(降魔印)をしている。像の姿勢は、守護的な性質の神性をそこに見出すよう促すものである。しかしながら、彼女の光輪を飾る三つ葉装飾の宝飾(三弁宝珠)は、彼女が〔仏法の守護神としての性質を持つだけでなく、〕願いを叶えてくれる面も失っていないことを示している。本作品は群像表現である可能性もあるが、現時点ではこれを確実に特定する事例は見つかっていない。²²⁾

フランクはこの研究において、作品タイトルを《未特定の女神像(Divinité féminine non identifié)》とした。また制作地の言及もしていない。

ちなみに、現在フランス国立美術館連合RMNが提供する本作品と同一の収蔵番号の画像(図4)は、フランクの研究書に掲載された画像(図3)とは右手の向きが異なっている。フランクの図版では「降魔印」であるのに対し、後者は吉祥天像に見られる、掌を外側に向けた「与願印」である²³⁾。手の向きが変えられた経緯は不明だが、現在ギメ美術館の所蔵データベース上では、本作品が「日本」の「吉祥天像」と特定されているので、手の接合部分の不自然さなどから修復が行われ、その結果、与願印をしている吉祥天と同定されたのかもしれない。

ところで、興味深いことにギメ美術館には、《吉祥天女像》に似た木彫で彩色され、微笑みを湛えた日本の《鬼子母神像》(MG4679)(図5)が所蔵されていることも判明した。この作品は、おりしも私の調査の2か月前にフランソワ氏がコミッショナーの一人を務められた展覧会「アジアの医学(Médecines d'Asie, l'art de l'équilibre)」の出品作の一つであった²⁴⁾。そのため、期せずして氏から両作品に見られる類似性をご教示頂くことができた。

むろん両作品を細かく比較すれば、持物をはじめ異なる点が認められる。しかしながら、前述したように1878年には少なくとも2点の鬼子母神像を所蔵していたギメは、それらと形状のよく似たグベールの寄贈作品を、鬼子母



図3 《未特定の女神像》木彫彩色、金色のハイライト、h. 24 cm、パリ、国立ギメ東洋美術館。出典：Frank, *op.cit.*, p. 206.



図4 《未特定の女神像》日本、木彫彩色、金色のハイライト、h. 24 cm、パリ、国立ギメ東洋美術館。Paris, Musée Guimet - musée national des Arts asiatiques © GrandPalaisRmn (musée Guimet, Paris) / Thierry Ollivier / distributed by AMF

神像と混同したと思われる。それが、礼状における「Shimosin」の表記に至らせたのではなかろうか。

なお、所蔵作品台帳をさらに参照すると、グベール医師は、中国で制作されたブロンズ製の馬の彫刻（MG16989）もギメ美術館に寄贈していたことが判明した。

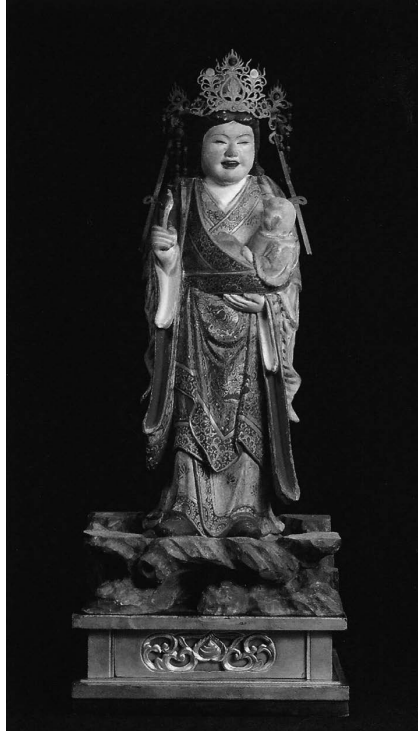


図5 《鬼子母神像》日本、18世紀 (?), 木彫彩色、ブロンズに金メッキ、h. 52 cm、パリ、国立ギメ東洋美術館。出典：Frank, *op.cit.*, p. 219.

6. ラ・マルミットの成り立ちと会員たち

この礼状において注目すべき点は他にもある。それは、署名の下に書き添えられた、以下の私的なメッセージである。

あなたのマルミトゥーナメニューの数々にも、心から感謝いたします²⁵⁾

「マルミトゥー」とは、古語を多く扱うアカデミー・フランセーズの辞書によると、口語表現の古語で「貧しい」「不十分」という意である²⁶⁾。だがこの場

合にそれは当てはまらない。というのも、この一語には、ギメとグベール医師が属した政治結社「ラ・マルミット」の意味が込められているからである。

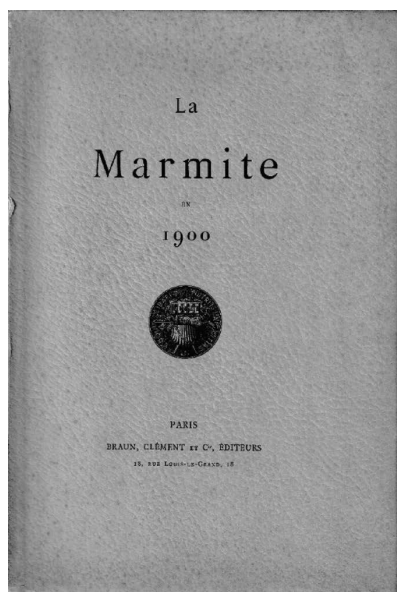


図6 『1900年のラ・マルミット——共和主義マルミット年報』
La Marmite en 1900 : Annales de Marmite Républicaine,
Braun, Clément et Cie. Paris, 1900, 岡村嘉子蔵。

ラ・マルミットとは、フランス第三共和政下の1870年初頭から1920年代後半にかけて存在した共和主義者の結社である²⁷⁾。活動内容については、1901年に452部刊行された700頁を超える『1900年のラ・マルミット——共和主義マルミット年報』(以下『ラ・マルミット1900』と略記)(図6)が詳しい。本書には1900年当時に限らず、以下に見るような創設以来の様々な記録が収録されている。

例えば、1893年12月の晩餐会における、結社の会長だった小説家ジュール・クラレティ(Jules Clarétie 1840-1913)のスピーチの記録である。それによると、同結社は1873年11月にパレ・ロワイヤルの小さなレストランで、作曲家シャルル・ルフェーヴル(Charles Lefebvre)を囲む初等教育協会の気

の置けない仲間たちが夕食を楽しくともにした折に、毎月同じ日に集まることにしたのが始まりという。やがて当時ヴェルサイユに移転していた国民議会で速記係を務めるルフェーヴルが毎回議員たちを連れてきて、各界の名士たちも参加するようになり、公共事業大臣を務めた元老院議員エドゥアール・ミロ (Édouard Millaud 1834-1912) によって「ラ・マルミット」と命名されたという²⁸⁾。

ここでフランス第三共和政の歴史を、ラ・マルミットの歩みに合わせてごく簡潔に辿りたい。フランスは1870年9月4日に第三共和政が発足した。だがラ・マルミットが結成された1873年は、コミューン壊滅後の反動的な政治の時代であり、国民議会では共和主義者よりも王党派が多数を占めていた時期に当たる。共和主義者が政治の中核につき、第三共和政が議会主導の体制として確立するのは1877年のことである。そして1880年代に今日のフランス〔第五共和政〕社会の基礎となる様々な法制度がつくられていく。それはまたフランス革命期〔第一共和政〕に目指された理念が実体化されたものであったため、「革命の制度化」が進められた時代とみなされている²⁹⁾。こうした歴史に鑑みると、ラ・マルミットの歩みは、議会の共和主義者が少数派から多数派へと拡大し、後述する会員たちが政治の中核を担っていく過程にしっかりと沿っているように思われる。

話を結社の名称に戻すと、このフランス語の名詞「マルミット marmite」とは、円筒形の深型両手鍋を表す語である。クラレティは結社名「マルミット」を「家庭的であるとともに民主主義的な、名状しがたいもの」である名³⁰⁾と表現する。そして彼は、結社の性質を以下のように説明する。

薪東にも色々あるように〔「人(物)も様々」との二重の意味もあり〕、深鍋〔マルミット〕にも色々ある。我等のマルミットは、伝説的なチキンのポトフ〔アンリ4世の発言から、「チキンのポトフが食べられる」には「安楽に暮らせる」の意味もあり〕にも引けをとらない、大衆的なポトフ用のそれである。これは憎しみの深鍋ではなく、友愛を育む深鍋であり、兵士たちが飯盒を囲むがごとく、すべての善良な人々が一つの思想のもとに結集して囲む深鍋なのである³¹⁾

「一つの思想」とは前述の通り共和主義である。その理念のもと、ラ・マル

ミットは晩餐会を毎月第三金曜日に催した³²⁾。そこでは趣向を凝らした料理が用意され、それが記された美しいデザインのメニューをラ・マルミットの会員である芸術家たちが毎回制作した³³⁾ (図7)。料理へのこだわりはクラレティの他の発言にも見られるものである。彼は、ラ・マルミットを「私たちの小さな料理共和国 (notre petite République culinaire)」と称した³⁴⁾。そしてその小共和国が、重要局面において「大きなもの、国としての共和国 (la grande, la République nationale)」への奉仕に役立ったと述べている³⁵⁾。

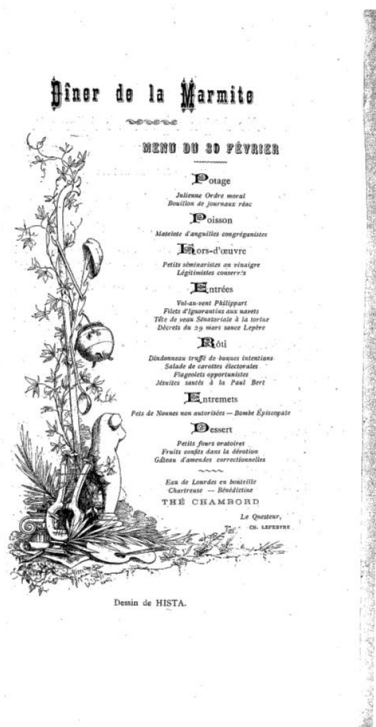


図7 画家・装飾家のイスタ (Hista)³⁶⁾ が手掛けた2月30日〔年代不詳〕のメニュー。『ラ・マルミット・アルバム』*Album de la Marmite*, Paris, Librairie d'art, L.Baschet Éditeur, 1880, p. 14, パリ、フランス国立図書館蔵。

また、引用したクラレティの言葉通り、ラ・マルミットは開かれた会であり続けたようである。クラレティの後任の会長は、ラ・マルミットの会合が他と一線を画する点を、地域や職業を限定せず、フランス国民である限り参加資格があることと述べ、外国人も受け入れていることを付言している³⁷⁾。とはいえ記録を見る限り、外国人の入会はかなり限定的であったといえる。1900年の会員名簿には、シェルブール海軍学校出身の技師で中国人高等官吏一名が記載されている³⁸⁾。

他にも同結社には、大統領を務めたレイモン・ポワンカレ (Raymond Poincaré 1860-1934)³⁹⁾ や公教育・美術大臣ポール・ベール (Paul Bert 1833-1886)⁴⁰⁾ や同大臣レオン・ブルジョワ (Léon Bourgeois 1851-1925)⁴¹⁾ をはじめとする時の政治家や財界人や芸術家が会員として数多く在籍していた。なお、ポワンカレ (1896年就任)、ベール (1877年就任)、ブルジョワ (1898年就任) の3名は会長も務めていた⁴²⁾。

また同結社に関わりを持った人物には、首相や公教育大臣や外務大臣を務めたジュール・フェリー (Jules François Camille Ferry 1832-1893) がいる⁴³⁾。フェリーは、1879年のギメ美術館開館時に大臣として列席した人物でもある⁴⁴⁾。彼は1881年から1882年にかけて、いわゆる「フェリー法」と呼ばれる、初等教育に「無償・義務・世俗化」という原則を持ち込んだ法案を成立させている。また1881年には女子中等教育の拡充を、1882年には女子高等師範学校の設置及び女性に対する1等教員資格の授与も実行した⁴⁵⁾。それらは「自由・平等・友愛」をうたう第三共和政を特徴づけるものであったといえる。その他、会員時期は不明だが⁴⁶⁾、『ラ・マルミット1900』の訃報欄から同結社の関係者と考えられる人物のうち、ギメと関係があった人物に、宗教史家・作家のエルネスト・ルナン (Ernest Renan 1823-1892) と、銀行家・経済学者・東洋美術コレクターのアンリ・セルヌッシ (Henri Cernuschi 1821-1896) がいた⁴⁷⁾。

ところで同結社には、作家や芸術家や美術関係者が数多く在籍したことも特徴の一つである。彼らは前述のメニュー表のほか、メダルや音楽や詩など、ラ・マルミットのために多くの作品を制作し、さらに同結社の晩餐会や宴のために作品を提供した⁴⁸⁾。

ギメの会員時期と重なる芸術家の会員には、ニューヨークの巨大彫刻《自由》を制作した彫刻家オーギュスト・バルトルデイ (Auguste Bartholdi 1934-1904)⁴⁹⁾ がいる。彼は1882年に会長も務めた。他にもギメと同郷で、リュミエール兄弟の父の写真家・画家アントワーヌ・リュミエール (Antoine Lumière 1840-1911)⁵⁰⁾、ギメの極東調査旅行の随行画家フェリックス・レガメ (Félix Régamey 1844-1907)⁵¹⁾、アカデミー画家ジャン＝ジャック・エンネル (Jean-Jacques Henner 1829-1905)⁵²⁾、イラストレーター・小説家のアルベール・ロビダ (Albert Robida 1848-1926)⁵³⁾ があった。エンネルは、多くの女性画家を育てたことでも近年評価される画家である⁵⁴⁾。彼は、公的な美術学校への入学の認められなかった当時の女性を対象に、私的な画塾を設け、ルイズ・アベマ (Louise Abbéma 1853-1927) をはじめとする多くの女性画家をそこから輩出した。他方ロビダは、1880年に風刺新聞『ラ・カリカチュール』を創刊したイラストレーター、ジャーナリストであると同時に、SF小説家としても活躍した。彼の小説は大胆で先見性があり、発明がもたらす社会的影響が的確に予測されていたと評されている⁵⁵⁾。それは、彼が描いた未来には、環境汚染問題の他、女性の選挙権取得や、医師や弁護士といった職業への進出という女性の社会的な地位の向上が描かれていたためである⁵⁶⁾。

彼らは、共和主義を掲げる結社の理念を自らの専門分野で実践していたように思われる。月に一度開催された会合の影響力や結束の強さがうかがえよう。

7. ギメとラ・マルミット

『ラ・マルミット1900』の会員名簿には、ギメの名が、肖像写真や生年1836年と出身地リヨンと「実業家、作曲家、作家、ギメ美術館創設者兼館長」の記述とともに掲載されている⁵⁷⁾ (図8)。

これまでのギメ研究において、彼がラ・マルミットと関わりがあったことが、二、三の文献に数行言及されているものの、そこで具体的にどのような

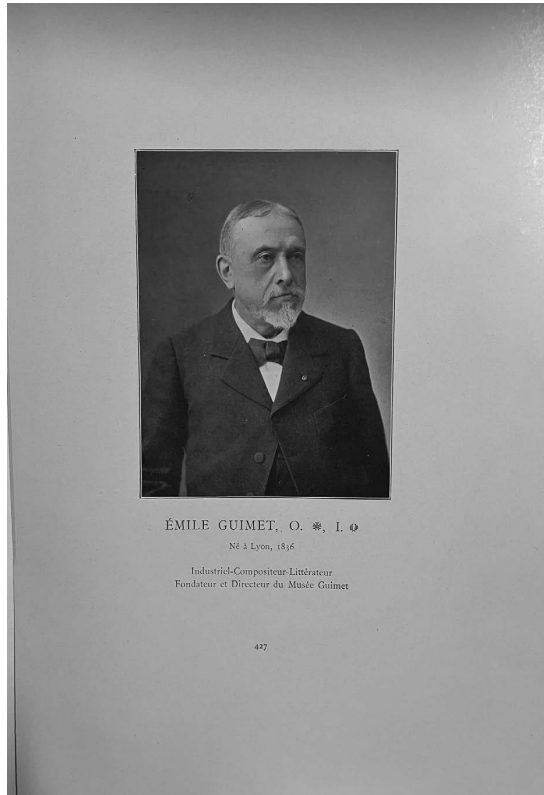


図8 『1900年のラ・マルミット——共和主義マルミット年報』掲載のギメの肖像。La Marmite en 1900 : Annales de Marmite Républicaine, Braun, Clément et Cie. Paris, 1900, 岡村嘉子蔵。

活動をしたかについては明らかにされていない⁵⁸⁾。だがラ・マルミットの会誌は、ヴェールに包まれた両者の関係について、いくばくかの情報を与えてくれる。

ギメがいつから会員となったかは現段階では不明である。少なくとも1880年の『ラ・マルミット・アルバム』の会員名簿⁵⁹⁾にはまだ名がない。ただ、『ラ・マルミット1900』にまとめられた歴代の催事を見ると、1889年にはこの結社と関係を深めていたように思われる。なぜなら同年にはギメの関係する

催しが2回行われていたからである。まず、1889年2月15日にギメに捧げられた晩餐会が開催された。その際のメニュー表は、アルフレッド・ジェラルダン (Alfred Gérardin 1841-1905) が制作したされる⁶⁰⁾。続く3月17日には、ギメの案内で、開館前のギメ美術館でコレクションを見学させる会合が行われたことが書かれている⁶¹⁾。パリに移転したギメ美術館が国立美術館として開館したのは、1889年11月20日であるので、早い時期の内覧会であったことがわかる。

この1889年という年は、フランス及び共和主義を掲げるラ・マルミットにとって象徴的な年である。1789年のフランス革命から100年目にあたり、それを記念したパリ万国博覧会が開催された年であるからだ。その最たる象徴の一つは、おそらくエッフェル塔の建造であろう。この塔の設計者ギュスターヴ・エッフェル (Gustave Eiffel 1832-1923) もまたラ・マルミットの会員であり、1890年には会長にも就任していた⁶²⁾。ギメ美術館での内覧会の翌月に当たる4月18日の晩餐会は、「100周年記念の晩餐会」と題されていた⁶³⁾。同日、会員たちは開会前の万博会場にて、会員の画家テオフィル・ポワルポ (Théophile Poilpot 1848-1915) によるパノラマ画〔フランス国立図書館所蔵のジュール・シェレ (Jules Chéret 1836-1932) によるポスターから、カンパニー・ジェネラル・トランスアトランティックのパノラマと考えられる⁶⁴⁾〕を見学したことが記録に残っている⁶⁵⁾。また6月4日の晩餐会は、エッフェル塔のレストラン「アルザス＝ロレーヌ」にて開催された⁶⁶⁾。

1891年は外務大臣や公教育大臣を務めたマルスラン・ベルトゥロ (Marcellin Berthelot 1827-1907) が会長を務めた年である。その5月15日の晩餐会では、食後にギメが作曲した「ラマルティーン賛歌 Hymes de Lamartine」が初演されたと記されている⁶⁷⁾。1900年の名簿に、実業家に次いで「作曲家」と記された理由は、こうした音楽分野における結社への貢献があったからと思われる。

だがギメの生涯の仕事から、ラ・マルミットとの関わりを見た場合、彼の社会事業家としての側面との関わりも看過できない。それはまず教育分野が挙げられるであろう。彼は美術館を中心とした教育事業の他に、様々な地域の教育機関の要職をつとめ、さらに父の代から引き継いだ学校経営にも尽力

した⁶⁸⁾。ギメ美術館元館長のジャン＝フランソワ・ジャリージュは、ペールやフェリーのよう人物が、ギメの教育分野での活動への支援を惜しまなかったと述べている⁶⁹⁾。既に見た通り、彼らはともにラ・マルミットの関係者である。それに加えて、ラ・マルミットの会員にはブルジョワやベルトゥロなどの公教育大臣経験者や、関係省庁や機関の高官たちもいたことが、ラ・マルミットの会報からわかる。その一方で、ギメにはユマニストとして知られた化学者の父が創設した合成染料会社と教育分野の社会事業を引き継ぎ拡大した経験があり、ラ・マルミットとは関係なく独自に培った理念と国際的な幅広い人脈もあった⁷⁰⁾。そのため、ギメの教育事業の実現の背景をすべてこの結社に帰することはできない。だが、少なくともラ・マルミットが主催した晩餐会をはじめとする様々な催事も、その一助となったのではないかと思われる。

8. グベール医師のプロフィール

ところで、《吉祥天女像》を寄贈したグベールについて、ギメ美術館の記録では「グベール医師」と記されるのみにて、苗字と職業以外の情報が無い。だが、『ラ・マルミット1900年』には、彼の肖像写真とともに、より詳しく彼のことが記されている（図9）。

エミール＝ジュリアン・グベール

1852年10月11日、ゴンドルクール（ムーズ県）生まれ。

医師、財務省登記・土地・印紙管理局医師、医学アカデミー受賞者、ラ・マルミットの財務担当⁷¹⁾

別のページには、ギメの礼状の宛先と同一の、ボーダン通り6番地と記されている⁷²⁾。それはセヌ川を北にして、パリ・オーステルリッツ駅の右隣あたりの今日の13区であり、付近に大病院が点在する地区である。

彼の名は、1900年の名簿に先行して、『1892年7月3日日曜日のラ・マルミットの夏祭』参加会員名簿にも、夫人同伴で参加したことが記されてい

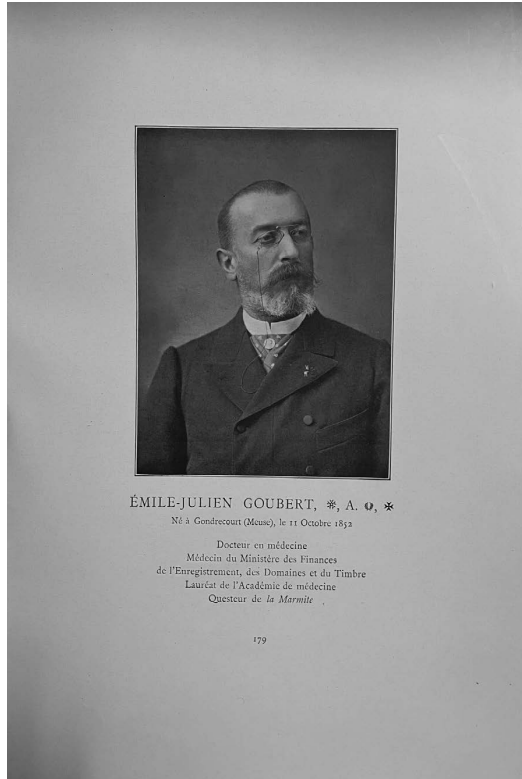


図9 『1900年のラ・マルミット——共和主義ラ・マルミット年報』掲載のグベール医師の肖像。La Marmite en 1900 : Annales de Marmite Républicaine, Braun, Clément et Cie. Paris, 1900, 岡村嘉子蔵。

る⁷³⁾。

グベール医師の専門分野は現在のところ不明である。フランス国立図書館(以下 Bnf と略記) には、彼の著書と考えられるものが一冊所蔵されている。それは、1878年に医師が医学博士号を取得した際の論文「反復流産の病因について」⁷⁴⁾ である。Bnf の記録によると、彼の生年は1852年、没年は不詳である。この生年は、『ラ・マルミット1900年』の記述と一致しているため、両者は同一人物と推測される。

なお、Bnfに著書の所蔵がある、19世紀後半に活躍した「エミール・グベール医師」には、生没年の異なるもう一人の人物が存在する。1867年の『死体解剖技術の手引——病理学的解剖学への応用を中心に』⁷⁵⁾ や、1865年にロシア出身フランス人科学者でオーギュスト・コント (Auguste Comte 1798-1857) の弟子グレゴワール・ヴィルボフ (Grégoire Wyruboff 1843-1913) との共著『科学対宗教』⁷⁶⁾ を出版した医師である。Bnfの記録によると、彼の生没年は (18..-1867) である。つまり、生年が19世紀という以外は不明であるが、なによりも没年がラ・マルミットの結成以前の1867年であることから、ギメ美術館作品寄贈者とは同名の別人であるのが明らかである。

9. 1898年12月16日の晩餐会メニュー

「ラ・マルミット」において、グベール医師は財務担当という役職にあった⁷⁷⁾。1893年の財務担当就任時には、クラレティから以下のような祝辞が述べられている。

エミール・グベール博士は私たちの忠実な同志の一人です。芸術の友として、骨董品愛好家として、エナメル工芸収集家として、彼は私たちのメニューやコンサートの企画をお世話下さることでしょう。また医師として、私たちに消化のよいようご配慮下さるはずです。⁷⁸⁾

クラレティは、グベールが優秀な医師として、ラ・マルミットの前任の財務担当の病を治療し回復させたことも紹介している⁷⁹⁾。

前述の通り、「小さな料理共和国」たるラ・マルミットは、晩餐会のメニューを重視していた。クラレティのグベールに向けた発言からすると、それは「消化のよい」ように健康に配慮したメニューでもあったようである。ではいったいどのような料理が提供されていたのであろうか。それについては、ラ・マルミットの晩餐会の各回のメニューを含む、この結社の膨大な資料を収集・整理し、実態を検証したティエリー・テシエの2016年の研究が詳しい⁸⁰⁾。同論文に収録された当時のメニュー集には、おそらくギメが礼状にて言

及したメニューの一つと思われる1898年12月のメニューも掲載されている。それは画家ポール・メルワール（Paul Merwart 1855-1902）が手掛けた24.8×32 cmの版画で、晩餐会の日付は、1898年12月16日である。つまり、礼状の日付12月29日の約2週間前に該当する。その日の献立は以下の通りであった。

ポタージュ：マイエルペーア⁸¹⁾のコンソメ

香辛料の利いたオードブル・ヴァリエ：ジュネーヴ風ソースのイシビラメと蒸しポテトのムスリース〔ピュレ状の材料に泡立てた生クリームを一定量加えたもの〕

アントレ：大串に刺したシャロレー〔上質の肉用種〕の牛肉フィレとスコットランド風付け合わせ／ブルゴーニュ風野ウサギの赤ワイン煮込み

ローストコース：ル・マンの極上ローストチキン、クレソン添え／マシュとセロリとビートのサラダ

アントルメ：ホテル長流のサヤインゲン／ガトー・モンデジュール／ルネサンス

アイスクリーム：フォヴェット・ボンブグラッセ〔円錐形アイスクリーム〕

デザート：フルーツ盛り合わせ／プティ・フル

ワイン：メドックのカラフ／ボヌ／シャンパン／コーヒー、リキュール⁸²⁾

ポタージュからデザートまで、風味豊かな品が並んでいる。また肉料理には、クレソンやマシュやセロリ、ビートといった食物繊維やビタミンの豊富な、消化を促す野菜が配されており、会長から期待された通りのメニューをグベールが提供していたことが伺える。なおアントルメの料理に「ホテル長」の名が登場するのは、ラ・マルミットが晩餐会の会場として主に使用された⁸³⁾ホテル・コンチネンタルと関係しているのかもしれない。

10. 忘れられた結社、ラ・マルミット

ところで、先行研究において、ラ・マルミットの実態やフランス社会へ与えた影響等に関する検証はほとんど行われてこなかった。現在もこの結社について知るには、当時の会報を参照するほかには、前述のテシエの研究を参

照する以外にない。いわば、忘れられた存在なのである。本論でも述べた通り、この結社には多くの芸術家が参加し作品を提供していた。しかし、各芸術家の研究書においても、ラ・マルミットとの関係については殆ど言及されていない。

テシエによると、この結社は最盛期には300人以上が集まり、報道からも目を注がれるなかで芸術と政治についての議論が行われていたが、美術史にその痕跡を一切残していないという⁸⁴⁾。国立古文書館やパリやデジョン、さらには社交界のアーカイブを調査したテシエは、ラ・マルミットに関する文書がほとんどない原因について、可能性は低いながら完全に否定できない仮説として以下の二つを挙げている。一つ目は、文書が断片的に回収され最終的に廃棄された可能性であり、二つ目は故意に書架から抹消された可能性である⁸⁵⁾。テシエは、こうした会合ではアイデアや同盟関係や政治的な計画が生まれたに違いなく、閣僚となった議員たちか、国際的に著名になった芸術家たちのなかには、自分の過去のこの部分について、詳しく調査されることを望まない者たちがあつたのではないかと推測している⁸⁶⁾。さらに会場として使われたホテル・コンチネンタルも、文書を廃棄しているという⁸⁷⁾。そのため、この先数十年の間に、偶発的な発見に恵まれない限りは、彼の仮説を検証も反証もできないとし、ラ・マルミットが忘れられた理由は明らかにならないままであろうと述べている⁸⁸⁾。

結論

以上、本論では1898年12月29日にギメがしたためた一通の礼状を巡り、寄贈作品の内容と、寄贈者とギメの関係を結ぶ結社ラ・マルミットの活動を検証した。その結果、ラ・マルミットの財務担当を務めた財務省登記・土地・印紙管理局の医師エミール・グベールが、この結社の会員であるギメが館長を務めるギメ美術館に、19世紀の日本の木彫彩色《吉祥天女像》を寄贈したことが明らかになった。

現在、東洋美術の殿堂となっているギメ美術館のコレクションは、ギメの

没後に複数回行われた他館の収蔵品の移管や、発掘調査団による考古学資料の収蔵や改修等により⁸⁹⁾、ギメの監督下で形成された時期のコレクション内容が分かりづらくなっている。

そうしたなかで、日本の女神像が穏やかに微笑む本作品は、ギメの日本の宗教美術への強い関心とともに、彼の共和主義者としての交友関係も裏付ける貴重な作品といえる。そして、その《吉祥天女像》の収蔵の経緯やギメとラ・マルミットとの関わりを物語る新資料であるこの礼状は、ギメ研究の上で大変有効なものであると考えられる。

註

- 1) 現在の正式名称はフランス国立ギメ東洋美術館 (Musée national des arts asiatique-Guimet)。
- 2) ギメのグベール医師宛て書簡、1898年12月29日付、岡村嘉子蔵 (以下、ギメ礼状グベール宛と略記)。
- 3) 調査内容に関しては、以下を参照：岡村嘉子「エミール・ギメのリヨン東洋語学校設立とその動機」『総合社会科学研究』第4集5号、2023年3月、1-17頁 (以下「ギメの東洋語学校」と略記)。
- 4) 美術館名の下に部署名「Direction」が印刷されたものも使用されている。
- 5) 以下〔 〕は筆者註。
- 6) 拙訳。ギメ礼状グベール宛、“une divinité japonaise en bois sculpté, représentant une fille de Shimosin.”
- 7) *Le Jubilé du MUSEE GUIMET Vingt-cinquième anniversaire de sa fondation 1879-1904*, Paris, Ernest Leroux Editeur, 1904.
- 8) *Ibid.*, p. 42.
- 9) 同リストには他の寄贈者欄において、寄贈作品内容の省略表記が認められる。
Ibid., pp. 44-45.
- 10) この展示に関しては以下を参照：岡村嘉子「1878年パリ万国博覧会トロカデロ宮における二つの日本美術展示の位相——エミール・ギメと日本万博事務局」『成城美学美術史』第29号、成城美学美術史学会、2023年3月、39-63頁。
- 11) *Exposition universelle Galeries historiques-Trocadéro, Religions de l'extrême orient, Notice explicative sur les objets exposés par M.Émile Guimet et sur les peintures et dessins faits par M.Félix Régamey*, Paris, Ernest Leroux Éditeur, 1878.
- 12) *Ibid.*, p. 28.
- 13) *Ibid.*, p. 36.

- 14) *Ibid.*, p. 28.
- 15) *Ibid.*, p. 36.
- 16) 当時のサンスクリット語研究における日仏の状況については以下を参照：福井文雅「エミール・ギメの学問史的 위치づけ」『欧米の東洋学と比較論』隆文館、平成3年7月。
- 17) *Catalogue des objets exposés, précédé d'un aperçu des religions de l'Inde, de la Chine et du Japon*, Lyon, Imprimerie Pitrat aîné, 1880.
- 18) 日本人留学生のギメ美術館における貢献については以下を参照：岡村前掲論文「ギメの東洋語学校」〔註3〕。
- 19) Kの語源と変遷については以下を参照：ロベール仏和大辞典、小学館。
- 20) Frank, Bernard, *Le panthéon bouddhique au Japon - Collections d'Émile Guimet*, Musée national des arts asiatiques Guimet, 1991, p. 206.
- 21) なお、フランクと当時のギメ美術館館長ジャン＝フランソワ・ジャリージュが監修した1989年の「蘇るパリ万博と立体マンダラ展」の図録には、本作品に形状と材質、寸法が酷似した《鬼子母神像》(収蔵作品番号不記載)が出品作品として掲載されている。作品解説は以下の通りである：「左手に蓮華を持ち、右手は「降魔」を示す手であり、円城寺〔園城寺〕タイプである。しかし光背を飾る三弁宝珠から見ると、福德神族の天女らしく思われる」『蘇るパリ万博と立体マンダラ展』図録、西武百貨店、1989年、77頁。
- 22) 拙訳。Frank, *op.cit.*, p. 206. “L'image porte dans la main gauche une tige de lotus à grande feuille et fleur en bouton, et tient la droite pointée vers le sol, paume tournée vers l'intérieur, dans le geste signifiant la subjugation de tout ennemi intérieur ou extérieur (gôma-in), pose qui engage à y reconnaître une divinité de nature gardienne. Toutefois, les bijoux trilobés (sanben-hôju) qui ornent son auréole montrent qu'elle n'est pas non plus dépourvue d'un aspect de dispensatrice. Il se peut qu'il s'agisse d'une figure de groupe, mais nous n'avons, jusqu'à présent, trouvé aucun exemple qui permette de l'identifier avec certitude.”
- 23) しかしながら、RMNが提供する画像のタイトルは《未特定の女神像》のままである。
- 24) *Médecines d'Asie, l'art de l'équilibre*, cat.exp., Musée national des arts asiatique-Guimet, 2023, pp. 140-141.
- 25) 拙訳。ギメ礼状ゲベール宛。“Bien reconnaissant aussi vos menus marmiteux”.
- 26) *Dictionnaire de l'Académie française*, 9^e édition, marmiteux, -euse | *Dictionnaire de l'Académie française* | 9e édition
- 27) ラ・マルミットに関しては以下を参照： *Album de la Marmite*, Paris, Librairie d'art, L.Baschet Éditeur, 1880 (以下 *Album de la Marmite 1880* と略記); *Annuaire*

- pour 1888 La Marmite*, Paris, R. Richard, 1888; *Fête d'été de la "Marmite" le dimanche 3 juillet 1892, présidée par M. A. Burdeau*, Paris, imp. de J. Montoriet, 1892; *La Marmite en 1900: Annales de Marmite Républicaine*, Paris, Braun, Clément et Cie., 1900 (以下 *La Marmite 1900* と略記); Tessier, Thierry, *Les Dîners de la Marmite 1873-1928 Étude critique*, *Academia edu*, 2016, pp. 1-218.
- 28) Dîner du 29 décembre 1893 Toast à « LA MARMITE » par M. Jules Clarétie, *La Marmite 1900*, pp. 23-25.
- 29) 第三共和政の概略及び都市部の議会構成については以下を参照：平野千果子（編著）『新しく学ぶフランス史』ミネルヴァ書房、2019年、142-148頁；長井伸仁『近代パリの社会と政治——都市の日常を探る』勁草書房、2022年。
- 30) *La Marmite 1900*, p. 25. “ce nom qui a je ne sais quoi de familial à la fois et de démocratique.”
- 31) 拙訳。 *Loc.cit.* “Il y a marmite et marmite comme il y a fagots et fagots. La nôtre est la marmite du pot-au-feu populaire, qui vaut bien la poule-au-pot légendaire ; ce n'est pas la marmite de la haine, c'est la marmite nourricière de la fraternité autour de laquelle toutes les bonnes gens se groupent, unis par une même pensée, comme les soldats autour de la gamelle.”
- 32) *Ibid.*, p. 26.
- 33) Les menus de la Marmite, *ibid.*, p. 32.
- 34) *Ibid.*, p. 26.
- 35) *Loc.cit.* “…notre petite République culinaire qui a eu, aux heures critiques, son rôle utile pour le service de la grande, la République nationale !”
- 36) *Album de la Marmite 1880*, p. 114.
- 37) Réponse de M. Paul Beurdeley, *ibid.*, p. 29.
- 38) *Ibid.*, p. 585.
- 39) *Ibid.*, p. 18.
- 40) *Ibid.*, page non numérotée (Nécrologie).
- 41) *Ibid.*, p. 9.
- 42) *Ibid.*, page non numérotée (page liminaire).
- 43) 16 avril Dîner offert à M. Jules Ferry, *ibid.*, p. 132.
- 44) Omoto, Keiko et Macouin, Francis, *Quand le Japon s'ouvrit au monde*, Paris, Gallimard, 1990, p. 90 (邦訳：尾本圭子・フランシス・マクワン『日本の開国』創元社、1996年2月)
- 45) 女子教育に関しては以下を参照：前田更子「19世紀末のフランスにおける女子師範学校の世俗化と宗教」『明治大学人文科学研究所紀要』第87冊、明治大学人文科学研究所、2020年3月。

- 46) *La Marmite 1900*以外の〔註27〕の文献に彼らの足跡は認められなかった。
- 47) *La Marmite 1900*, page non numérotée (Nécrologie).
- 48) *Ibid.*, pp. 30-123.
- 49) *Ibid.*, p. 209.
- 50) *Ibid.*, p. 519.
- 51) *Ibid.*, p. 625.
- 52) *Ibid.*, p. 435.
- 53) *Ibid.*, p. 637.
- 54) *Elles: Les élèves de Jean-Jacques Henner*, cat.exp., Paris, Le musée national Jean-Jacques Henner, 2024.
- 55) Tessier, *op.cit.*, p. 173.
- 56) *Loc.cit.*
- 57) *La Marmite 1900*, p. 427.
- 58) 主なものに以下の研究がある : Jean-François Jarrige, Emile Guimet (1836-1917): un novateur et un visionnaire, *Comptes rendus de l'Académie des inscriptions*, 2000, p. 1362; Levy-Rueff, Bruno, Émile Guimet, bourgeois atypique, *D'outremer et d'Orient mystique...Les itinéraires d'Émile Guimet*, Éditions Findakly, Patrimoines d'Orient, 2001, p. 148; Ferraton, Cyrille, Émile Guimet, entre patronage et économie sociale, *Les trésors d'Emile Guimet*, cat.exp., Lyon, Musée des confluences, 2014-2015, p. 23.
- 59) *Album de la Marmite 1880*, pp. 109-119.
- 60) *La Marmite 1900*, p. 136.
- 61) *Loc.cit.*
- 62) *Ibid.*, page non numérotée.
- 63) *Ibid.*, p. 137.
- 64) Chéret, Jules, Panorama de la Compagnie générale transatlantique peint par Th Poilpot. Dioramas peints par ... Exposition universelle 1889, quai d'Orsay..., affiche, 1889, la Bibliothèque nationale de Paris (以下 Bnf と略記).
- 65) *La Marmite 1900*, p. 137.
- 66) *Loc.cit.*
- 67) *Ibid.*, p. 140. しかしながらギメ研究では、このオラトリオは1888年に作曲されて、ナント大衆音楽祭で成功を収めたとされている。Guimet, Hubert, *Jean-Baptiste et Emile Guimet: La confluence de l'Art, de la Science et de l'Industrie*, Editions lyonnaises d'art et d'histoire, 2018, p. 218.
- 68) 岡村前掲論文、「リヨン東洋語学校」を参照〔註3〕。
- 69) Jean-François Jarrige, Emile Guimet (1836-1917): un novateur et un visionnaire,

Comptes rendus de l'Académie des inscriptions, 2000, p. 1362.

- 70) ギメの父ジャン＝バティスト・ギメ、及びギメの人脈については以下を参照：
Guimet, Hubert, *op.cit.* ; Émile Guimet, *Rapport au ministre de l'Instruction publique et des Beaux-Arts sur la mission scientifique de M. Émile Guimet dans l'Extrême-Orient*, Lyon, le 15 avril 1877.
- 71) *La Marmite 1900*, p. 179. “Docteur en médecine Médecin du Ministère des Finances de l'Enregistrement, des Domaines et du Timbre, Lauréat de l'Académie de médecine, Questeur de la Marmite”.
- 72) *Ibid.*, p. 13.
- 73) *Fête d'été de la “Marmite” le dimanche 3 juillet 1892, présidée par M. A. Burdeau*, Paris, imp. de J. Montoriet, 1892, p. 16.
- 74) Goubert, Émile, *De l'étiologie des avortements à répétition: thèse pour le doctorat en médecine...*, Paris: A. Derenne, 1878, Bnf.
- 75) Goubert, Émile, *Manuel de l'art des autopsies cadavériques, surtout dans les applications à l'anatomie pathologique*, Paris, Germer Baillière, 1867, Bnf.
- 76) Goubert, Émile, et Wyruboff, Grégoire, *La science vis-à-vis de la religion*, Paris, Germer Baillière, 1865, Bnf.
- 77) *La Marmite 1900*, p. 179.
- 78) 拙訳。 *Ibid.*, p. 27. “Comme ami des arts, amateur de bibelots, collectionneur d'émaux, il veillera au programme de nos Concerts et de nos Menus et, comme médecin, il sera chargé de nous assurer une bonne digestion.”
- 79) *Loc.cit.*
- 80) Tessier, *op.cit.*, pp. 1-218.
- 81) コンソメに名を冠せられたマイエルベアー Mayerbeer とは、19世紀、パリを活動の本拠地としたドイツの作曲家で、多くのグランドオペラを作曲したジャコモ・マイエルベアー（マイアベアー）（Giacommo Mayerbeer 1791-1864）のことを指すのか否か不明である。
- 82) Tessier, *op.cit.*, p. 99.
- 83) *La Marmite 1900*, p. 179.
- 84) Tessier, *op.cit.*, p. 74.
- 85) *Loc.cit.*
- 86) *Loc.cit.*
- 87) *Loc.cit.*
- 88) *Loc.cit.*
- 89) ギメ美術館のコレクション内容の変遷については以下を参照：Cambon, Pierre, Musée Guimet, ou Musée National des Arts Asiatique..., *Les collections du Musée*

Guimet à Paris, cat.exp., Musée des Arts Idemitsu, 1996, p. 137. (邦訳：ピエール・カンボン「国立東洋美術館としてのギメ美術館」翻訳者不記載、『パリ・ギメ美術館展—シルクロードに花開いた仏教美術の精華』展図録、出光美術館、1996年、13頁)；Mauriac Le Héron, Muriel, Raisons et conséquences des transformations du musée Guimet dans les années 1930, *Livraisons d'histoire de l'architecture*, No. 1, 2001, pp. 89-104.

〔附記〕

本稿の執筆にあたり、成城大学文芸学部 of 岩佐光晴教授と喜多崎親教授の温かいご指導を賜りました。またフランス国立ギメ東洋美術館コレクション部主任 M. Alban François アルバン・フランソワ氏、同館図書館館長 Mme. Cristina Cramerotti クリスティーナ・クラメロッチ氏及び司書の Mme. Saki Noël ノエル咲氏には、同館所蔵の貴重な関連資料を調査させて頂き、ご高配と有益なご助言を賜りました。パリ・ジュソーム書店社長 M. François Jousseume フランソワ・ジュソーム氏から貴重な資料のご提供を賜りました。ここに記して篤く御礼申し上げます。